

# ジャグパル

## JugPal



2005年1月1日 第26号



### インタビュー

【藤山 新太郎 さん】

はじめに

今回はまさにマジック界の重鎮・至宝とも言える『藤山新太郎』さんを訪問しました。

藤山さんのマジシャンとしての輝かしい経歴のほんの一端は文末の記載通りで、とても全てを書ききれはるはずもないのですが、今回は“マジシャン”としてではなく“芸人”としてお話を伺いたく出向きました。

藤山さんは様々な活動を精力的にこなされ、そのうちのひとつに執筆活動があげられますが、特に以下の連載物はマジック界に大きな反響を及ぼしています。



藤山新太郎さん

「そもそもプロというものは…」 ザ・マジック(東京堂出版発行の雑誌)にて1999年から連載中。  
プロマジシャンのスジ山金太郎とプロになりたてのコワザ光の会話を元に書かれたノンフィクションものですが、二人のユーモラスな会話を通して、マジック界の指針を、そしてプロのマジシャンの生き方を説いています。

「現代奇術論」 M・U・M. (SAM Japan の機関誌)にて1993年より連載中。  
自らライフワークと称するように、ここではマジックの作品、技法、マジシャン、歴史、現状、それに楽屋話などマジックに関するありとあらゆる事が書かれ、読者にマジックの素晴らしさを伝えていきます。

私もこの二作品の愛読者ですが、よく読んでみるとここに書かれてあることは何もマジシャンのためだけではなく、全分野の芸人にもあてはまるのが分かり、実に奥深い読み物になっています。ジャグパルの読者はジャグラーの方が多いかもかもしれませんが、マジックやジャグリングなどのカテゴリーを越えて皆さんにも役立つ示唆に富んだお話が聞けるものと、藤山さんの事務所に足を運んだ次第です。

しかし…はじめにお断り(言い訳)をしなければなりません。その日は何と8時間もの長き時間にわたってお付き合いいただき、マジックのみならず藤山さんからは古典芸能、映画、音楽、中世史、仏教史、スポーツ、企業経営、あるいは料理など多岐にわたり、それぞれに深掘りしたお話を伺うことができました。

残念ですがそれらを正確にお伝えすることは、私が浅学でお話を消化し切れていないであろうことと、私の文才の無さという点からも不可能なことです。

従って読者の皆様には申し訳ないのですが、その点をご容赦いただきお話し何分の一、いや何十分の一でも書き留められればと思ひ筆を進めます。

以降『 』内の記述は、藤山さんが仰ったことを私なりに咀嚼(そしゃく)して書き落としたものです。

## 時流を読む

お話を伺っていて、まず私が思ったのは藤山さんは恐らくどのような職業を選ばれても成功していたらうということです。

藤山さんは、常に十年後の世の中がどうなっていて、そこにはどういった自分が存在すべきかを明確にビジョンとして描き出し、そのために何をすべきかを見極めて確実に行動されていますし、しかも世の中が予測通りになってしまうというのが驚きです。

藤山さんは二十代半ばキャバレーのショーで仕事をしていたが、数年でキャバレーは無くなると感じ、当時宿泊客が頭打ちになり企業向けのコンベンションホール建設が盛んだったホテルでのイベント向けに仕事をシフトし、バブル期にはその類の場所で大がかりなイリュージョンマジックを主として活動していました。

バブルがはじけると社会の価値観は一転し、多様性の社会へ変貌し、と同時に時代は“和”の伝統・文化を見直すようになり、そのタイミングに合わせるが如くそれ以前から取り組んでいた和妻（日本古典奇術）に焦点が当たり引き合いが多くなりました。

何故そんなに時代の流れが予測できるのでしょうか。

そこには“藤山流・人のつきあい方”があります。具体的には恐らくどんな分野でも一握りの人間がその社会を動かしているそういった人自身、あるいはそこに近い人と利害抜きにして“遊ぶ”ことによって、世の中の人やろうとしていることが見えてくるということです。確かに藤山さんの人脈は、芸能関係のみならず政財界にも広くネットワークが張られています。

振り返ってみると時代の流れに呼応するが如く様々なジャンルのマジックが交互に現れては消えての流行を繰り返しています。時にはイリュージョン、時には超能力、時にはコメディ、そして今はクローズアップ…。

藤山さんは仰います。

『今の時代世の中はコロコロと変化し、一瞬にして価値観が180度変わることは往々にしてあります。昨日まで皆が善と信じていたことが、今日になってみたら悪。次に来る時代が何か分からずに、一つの時代の流れが終わると、多くの芸人が対応できずにやめていきます。何故でしょう。』



藤山さんの事務所にて

## 己をたてる

藤山さんはさらに続けます。

『芸の本質を見ていないからです。本質を見ようとせずに表面（おもて）に見えている所だけで生きていこうとするから時代の流れに対応できないのです。本質は変わらず、そこをおさえおけば、時代が変わっても表現方法を変えるだけで生きていけるのに、それをしないからだめなのです。』

しかし本質を見ずとも観客のニーズにそのつど応えていけばよいのではないのでしょうか。

『確かにマジックは常に観客がいないと存在し得ない芸能であり、つまり観客が求められていることに応えられなければなりません。』

ではそれだけに専念していれば良いのかというと、そうではないと仰います。

藤山さんがお弟子さんに説くことがあります。

『この世界で生きて成功するには、“己（こ）をたてる”ことが必須です。つまり自分というものが確立していなければならないということ。観客はそういった“己”、つまりひとつ筋の通ったものに惹きつけられるわけで、何でもやれば良いと言うことではありません。観客に、ああこの2時間の公演は他では体験できないし、やはり新太郎でなければだめだ！と思わせるような、唯一絶対で他に比すべき物が無いといった、己（おのれ）の創作活動を示せなければなりません。』

プロとは存在する事に価値があり、マジシャンが人生を賭けてしなければならない創作活動とはタネの創作だけではなく、むしろ自分自身の存在を創ることなのです。』

ある年齢までに自分でなければならぬものを探しあてる、つまり己をたてていないと、とんでもないことになること示唆します。

『恐らく誰しもそのような志を持って芸の世界に入るわけですが、いつしか生活に追われ続けて、言い訳続きの芸を続けていくうちに、ある日突然大きな川の流れからボツンと外れている自分に初めて気づくのです。それはネタを羅列するだけの演技構成に頼りきって、芸の本質を探ろうとせず、己をたてることを怠った結果なのです。』

## 芸に生きる

では観客は芸能の何に惹かれるのでしょうか。

藤山さんは仰います。

『単なるネタの羅列だけでは10分持てば良いでしょう。それ以上の時間となると、観客にこの人(演者)とならずと居ても良いと思わせる個性が必要です。でも個性だけでは30分程度しかもちません。それ以上、例えば2時間公演などでは内容として“ドラマ”が必要です。

芸に生きるということは“芝居”なんです。芸を見せるということは、日常と違う世界を見せるわけであり、その時点で演者は役者でなければならないのであって、それを意識していないマジシャンが、特にクローズアップのジャンルには多いと思います。

ショー全体をどう創り上げるかというグランドデザインが必要で、自分がどんなマジシャンなのか、自分とは何者かというスタンスの確立が大切です。』

どういことでしょうか。

『想像してみてください。クローズアップを例にとるならばネタを次から次へとマジシャンの都合で立て続けに見せられて観客は楽しいでしょうか。

クローズアップはマジシャンが決めたシステムで進行します。例えば、カードを一枚引いてくれ、覚えてくれ、サインしてくれ、戻してくれ、混ぜてくれ、なんやかんや…といった、いわばマジシャンの指示の元観客が動くというルールです。そういった枠組みに観客が気づくと、観客は単なるカードを引くための道具であり、マジシャンは単なるカードを当てるためのロボットみたいな物になってしまいます。そこにあるのはもはや機械的なやりとりのみです。

クローズアップの場合は、ショーのデザインなしに、“素”のまま登場して、ネタを次から次へと披露するだけでも成り立ちます。しかしこれが大きな落とし穴なのです。多くのマジシャンは、“夢 = 不思議”と考えますが、夢と不思議は無関係で、不思議は夢を作り出す一つ的手段に過ぎず、大切なのは不思議を越えたもう一つの世界を作り出せるかどうかなのです。』

ジャグリングにも同じ事が言えるのでしょうか。

『恐らく曲芸を曲芸として演じようとするれば、単独のショーとして2時間は持たないでしょう。やはりそこには“ドラマ”が必要です。

江戸時代には2時間でも3時間でも単独に演じられる曲芸の一座がたくさんあったのです。なぜそれが今成り立たないのか、ここをもっと考えるべきです。

誰でも出来るような曲芸でも、この人だったら感動するといった内容を創り上げるのがプロであり、感動させるためには何をすべきか、その答えは人それぞれに異なるでしょうが、曲芸以外の様々な芸の素養が求められることは確かです。

またマジシャンでもそうですが、演者はついネタを羅列して観客の緊張を高めることばかりしがちですが、実は流れを緩和させることこそが必要で、単に出来ることを見せるだけが芸能ではありません。緩急の心があって一つの芸能なのです。』

ではネタでなければ何を演じるべきなのでしょう。

『人間の心の奥底に潜む襞(ひだ)を知り、演者はそれを心の底から演じきらなければなりません。実際観客にはそういった部分は見えないかもしれませんが、そこにドラマを、あるいは何か奥深い物を感じるからこそ何回でも観たくなるのです。単なるネタの羅列だけでは、一回観たなら十分でしょう。

そこを演じられるかどうか、マジシャンとして生きるか、アーティストとして生きるかの瀬戸際なのです。

映画に当てはめてみれば分かりやすいのではないのでしょうか。

CGや特撮を駆使してそれをウリにした映画の表現手法には驚きはしますが、それ以上でもそれ以下でもありません。登場人物がたった二人でも、人間の愛情、憎悪といった情念や機微が描かれ胸をうつものは何回でも観たくなります。ドラマとはそういうことではないのでしょうか。』



ほろ酔いかげんの二人。  
藤山さん(右)と私(左)

## 古典の改革

何事も残る物には残る理由があり、消える物には消える理由があり、和妻は昭和四十年代には継承者がいなくなりました。

消え去ったのには理由があると藤山さんは考えます。端的に言えば当時の和妻は貧乏くさく、うらぶれていて、藤山さんがその時思ったのは、『和妻を演じることでステータスになるようにしなければならない。世間から和妻って華やかで高級なんですね、と言われるようにしなければならない。』ということで、そのためには何をすべきかが藤山さんの活動の原点であり、そのために時間を費やしてきたといっても過言ではありません。『古典だからと言って同じことをずっと続けていくのは意味がないし、古い物を古いまま演ずることが古典の継承ではないのです。

古典でも変わり続けなくてはならないし、そういった意味では継承と言うより創作の仕事です。別の言い方をすれば、和という素養を残して他のことを演じても全然構わないし、我々が財産として継承すべきものは文化であり芸であって、タネ仕掛けではありません。これを取り違えて和妻の改革はありえません。』

## 観るアマチュア

マジックに関して言うとアマチュアクラブは演じるアマチュアが主体で、観るアマチュアを排除しがちです。観るのが好きな人を取り込めないのが現在のマジック界の限界だと仰います。

『例えば落語の観客は落語をしますか、歌舞伎好きな人は歌舞伎をしますか。観る愛好家をもっと増やすことが大切です。』

では観る観客を増やすにはどうしたらよいのでしょうか。

『演者自身の個人的な魅力が無ければ劇場を満杯にはできません。個人の魅力が無いからタネ中心の演技になり、一回観れば十分と言うことになり観る観客が増えないのです。

現在は観るアマチュアを増やすことを主眼においた公演活動にも力を入れています。』

## おわりに

藤山さんにはプロやアマを問わず、下は中学生から上は定年後の方など、はっきりなしに人が訪ねてきて、そのたびに藤山さんは私を迎え入れたように、何時間でも語り合います。

なぜそんなに多くの人が集まってくるのでしょうか。

それは皆、芸能の持つ尊さ・卑しさ、楽しさ・哀しさ、錯雑さ・単純さなどに憧れ、戸惑い、あるいは悩みつつ藤山さんの元を訪れるわけですが、芸能の曖昧で不確かな非論理性の部分の分かりやすく面白おかしく語って下さるからこそ集まってくるのだと自ら実感しました。

ところで冒頭に紹介した「そもそもプロというものは…」と「現代奇術論」は機会があれば是非読んでいただきたいのですが、いずれ書籍として出版されることもお考えのようですから楽しみに待ちましょう。

### 藤山さんの略歴

1954年：東京都生まれ

1966年：初舞台(12才)

1977年：前名ジュニア南から藤山新太郎に改名。

1981年：マジックオブザイヤーに選ばれる。

1982年：2年連続マジックオブザイヤーに選ばれる。

1984年：日本奇術協会理事に選ばれる。

1988年：文化庁芸術祭に参加、芸術祭賞を受賞。

1991年：東京イリュージョン株式会社設立。日本奇術協会常任理事に選ばれる。

1992年：世界的マジック組織S.A.M.の日本地域局会長に選ばれる。

1994年：文化庁芸術祭賞を受賞。(2度目)

1998年：文化庁芸術祭賞を受賞。(3度目)

### [ 参考 ]

東京イリュージョンWebサイト<<http://www.tokyoillusion.co.jp/>>



## 大道芸と私

【わたしが大道芸を好きな理由 ~かものはしができるまで~】

ジャグパル読書の皆様、こんにちは。わたくし、HNかものはしと名乗っている者です。  
『誰?』と思われる方が多数だと思しますので、まずは自己紹介させていただきます。  
「大道芸日和(仮)」という情報サイトを管理しております。大道芸やサーカスなどのパフォーマンスが観られる場所・イベントに関する情報を集めたページで、リンク集とイベントカレンダーがメインです。ごくたまに出掛けたイベントの写真を載せたりもしています。静岡人で、趣味は温泉と地酒・地ビールめぐり。  
...えーと、つまりはただの面白い物好きの素人なのですが(苦笑)、何でも好きに書いて良いとお言葉をいただきまして、今回書かせていただくことになりました。うーん、チャン助さま、漢(おとこ)ですね。

それでは「わたくしが大道芸を好きな理由」について、書いてみようと思います。  
副題『かものはしができるまで』。ああ、難しいなあ。

わたくしは、母によると、子供の頃から世界びっくり人間とか、中国雑技とか、大好きだったようです。夢中で観ていたらしい。柔軟な身体とアクロバットに憧れて、器械体操をやったりもしていました。でも結局、「観る専門」に落ち着きました。  
はじめは毎年11月開催の『大道芸ワールドカップin静岡』がきっかけでした。じっくり観るようになったのは2000年からですので、その道の『通』の方からすると若輩者ですよ。その頃インターネットを使うようになっていたので、「大道芸ってどこか他でも観られるのかな?」と検索をかけてみたところ、ずいぶんいろいろなイベントがあるということがわかりました。  
ああ、観てみたい。この情報の先にはまだわたしの知らない世界が広がっている。お金はない、休みもあまりない、でも体力だけはあまる。  
そんなわけで、鈍行電車でどんぶらこと遠出する日々がやってきたのでした。  
集めた情報のうち、実際に足を運べるイベントなんて数が知れています。「これって、もったいないなあ」と思って、情報サイトを作ろうと思いました。もちろんその時点でもすばらしい情報サイトはありました(チャン助さまの「見世物広場」はわたくしにとって衝撃でした)。でもちょっと「通向け」すぎるな、もっとミナーな情報提供の場は作られないかな、と思ったのが今のサイトを立ち上げるきっかけです。

さてそのうち、パフォーマンスのライブにも足を運ぶようになりました。大道芸イベントで観た芸人さんが、舞台公演では違う魅力を放っているのを見て、いろいろなパフォーマンスへの興味が広がってきました。サーカスを観に行ったり、ダンスの公演を観たり、落語を聴きに行ったり。イベント等でほんの20分、芸人さんたちが見せてくれるパフォーマンスには、ずいぶんたくさんバックグラウンドがあったのだなあと思えて感じるのでした。  
これまでに時折、芸人さんとお話する機会にも恵まれましたが、「自分がやりたいこと」と「人に受け入れられること」のバランスに悩む方の多いことには、いつもちょっとびっくりしてしまいます。  
「人を笑わせること」「人を慰めること」「自己表現すること」「社会を皮肉ること」  
人それぞれに求めることは違って、皆さん「それ」に対してひたむきです。「観る側」代表になった気分が神妙に聞いているんですけど、内心嬉しくて仕方ないんです。「ああ、この人たちはどこまでも妥協しないんだな」と。いわゆる「バカバカしい」ネタのために真剣に訓練を重ねる姿なんて知ってしまうと、「あー、この人たちが大好きだ」と感動してしまうのです。

わたくしがパフォーマンス(とくに生の)を観るのが好きな理由は、単純に「面白い」のが第一です。第二の理由としては、先に書いたように、演じる側の『表現したい』欲求を観察したい(うーんわかりにくい)からではないかと思います。スポーツも、ダンスも、音楽も、文章も、自己表現能力にはまるっきり恵まれなかったわたくしにとって、『表現したいことを表現できる』人は憧れです。だからもっと観たい。出来れば近くで観てみたい。  
そんなわけで、ますます観てみたい芸人さんが増える一方で困った困った。

やっぱり、しばらくはイベント通いをやめられそうにありません。いろいろな出会いや出来事に感性を刺激される週末。いいじゃないですか~。今週末も大道芸日和になりますように。



大道芸日和(仮)

<http://platypus0601.hp.infoseek.co.jp/>

[かものはし]



# サーカス見物記

## 【上海雑技】

上海で雑技を観てきました。

上海には4箇所ほど雑技を観られるところがあり、今回は12月18日(土)に雲峰劇院、翌19日(日)に上海馬戯場に行って本場で上海雑技を堪能してきました。

雲峰劇院はステージ上の公演で、上海馬戯場は1999年に建設された雑技専用劇場でサーカスリンクがあり空中アクトも楽しむことができます。

両公演とも公演時間は19:30～21:00で、十数の演目が演じられ、雑技ならではの極限までに突き詰めた驚異的な演技が次々とスピーディに展開されます。

雲峰劇院では、コントーション、皿回し、ハットジャグリング、一輪車、椅子を高く積み重ねる“椅子頂”、輪をくぐり抜ける“地圏”、大きな瓶を操る“頂壘”、アイアンボールと呼ばれる鉄球(丸い檻)の中を複数台のオートバイが同時に走り回る“集体車技”など、雑技ならではの複数人によるアクロバティックな迫力ある演技で観客の目を釘付けにします。

集体車技以外は日本での雑技公演でも馴染みのある演目ですが、やはり本場で観ると雰囲気も違います。この集体車技では5台ものオートバイがアイアンボールで自由自在に走り回り、今まで観た中では4台が最大数だったので度肝を抜かれましたがそれは序章にしかすぎず、翌日の馬戯場でさらに驚くこととなります。

上海馬戯場での公演は、動物芸はないものよりサーカスらしく、クラウンが登場し演目と演目の間をつなぎます。

地圏、コントーション、様々な形態の片手倒立を見せる“单手揉柔術”、頭にお椀を乗せたままアクロバティックな演技をみせる“頂碗”、椅子を斜め方向に複数段積み上げてそれぞれの椅子の上で一斉に倒立をする“排椅”、空中演技、そしてトリは集体車技。ここでの集体車技は、なんと7台のオートバイが入り込みました！また長さ6m位の鉄棒の両端に人間が立って入れる位の大きな筒が接合されていて、鉄棒の中心を軸として筒付きの鉄棒が回転し、その筒の内や外で2人がスリリングな演技を展開する“大車輪”も雑技の演目としては初めて観ました。

両公演共に演出と言うほどの演出もなく、非常にシンプルに次々とこれぞ雑技！といった演目が披露され、あっという間の中身の濃い1時間半でした。



パンフレット (雲峰劇院)

参考:

雑技のチケットはインターネットから事前に予約することができます。

Webサイト 上海ウォーカー

<<http://www.shwalker.com/shanghai/>>

[安部 保範]



雲峰劇院の外観



雲峰劇院のステージ



集体車技 (雲峰劇院)



フィナーレ (雲峰劇院)



上海馬戯場の外観



フィナーレ (上海馬戯場)



# イベント情報



## 【 KABARETT KINEMA CLUB 】

カバレット・シアターシリーズ第5弾！  
『カバレット・キネマ・クラブ』

2月18日(金) 19:00開演  
東京キネマ倶楽部にて  
東京都台東区根岸 1-1-14  
Tel 03-3874-7988  
前売 3,500円  
当日 4,000円  
問合せ  
ACC:  
Tel <03-3403-0561>/Email <info@accircus.com>

出演(敬称略)

藤山新太郎(江戸奇術)/寒空はだか(漫談)/山本光洋(パントマイム)/三雲いおり(ヴォードビル)  
/ダメじゃん小出(コメディ)/神山一朗(マジカルマイム)/ふくろうじ(オブジェクトパフォーマンス)  
/VJコミックカット(映像)/サロク・ザ・ロービングシアター(ロービング)/森田智博(ジャグリング)  
/大熊バンド/ヨロ昆撫/ほか

### プロデューサからひとこと

カバチッタから1年以上のブランクがあったのですが、その間小さなところで実験的にカバレットはやってきました。今回は東京キネマ倶楽部という、元グランドキャバレーだった小屋にめぐり合い、この小屋にあったカバレットをつくりたいと思いました。下町の雰囲気もいれながら、さらにごった煮の感じを出したいと思っています。

前回カバチッタで初めて一緒に大熊ワタルさんもこの小屋を見て、いろんなインスピレーションが湧いてきたみたいですので、さらにスリリングな音とパフォーマンスのセッションが見られるのではないかと思います。今回は三雲いおり、ダメじゃん小出、ふくろうじが、キャバレーの従業員、山本光洋、神山一朗がバーテンダー、サロクが女給さんというように、昭和30年代のキャバレーという設定にしています。

ライブハウスのカバレットとはまたちがう、ノスタルジックな雰囲気を味わってもらえるのではないかと思います。寒空はだかさん、ヨロ昆撫さんという、とても楽しみなカバレットにぴったりの芸人さんたちも出演しますし、トリに登場する藤山さんの浮かれ蝶が、大熊バンドをバックにどう演じられるか、そして若手のジャグラー森田君の演技にも注目、ということで見どころ満載のステージになると思います。



プロデューサのクマこと  
大島 幹雄 より

<http://homepage2.nifty.com/deracine/>

## 【 CLOWN ! CLOWN ! CLOWN ! 2005 】

2月11日(祝日) 13:00, 17:00

2月12日(土) 11:00, 15:00

2月13日(日) 11:00, 15:00

名古屋市東文化小劇場にて

名古屋市東区大幸南 1-1-10

Tel <052-719-0430>

全席自由

当日 2,000円(大人) 1,000円(小人)

前売 1,500円(大人) 800円(小人)

問合せ

(有)プレジャー企画内クラウンプレジャー B

Tel <052-483-7779> / Fax <052-483-7774>

Email <plea-b@pleasure-p.co.jp>





## ビデオ紹介

### IJA オムニバス・ビデオ

年末まで溜めた年次休暇を利用して、買ったまま積んであったビデオを消化しようと思いつつ、雑用に追われてしまい、なかなか思うようには見られない年の瀬でした。

2005年、明けましておめでとうございます。

それにしても、最近ではジャグリング関係のビデオやDVDの発売数がずいぶん増えたものです。私とて、発売されるビデオすべてを買うお小遣いはありませんし、見る時間もありません。

そこで、「要点だけ押さえない」という人向けのオムニバス・ビデオを2点紹介しましょう。

### 【 The Jugglers That Jugglers Watch 】

つい最近 IJA から発売されたオムニバス DVDです。「ジャグラー達が見たがるジャグラー達」という題名が示す通り、過去のチャンピオンシップ、カスケード・オブ・スターズ・ショー、レネゲード・ショー (Renegade Show)、ジム風景などから、「有名ジャグラーの得意芸」「語り草になった演技」を抜粋したものを、いくつかのテーマごとに並べてあります。



毎年の IJA フェスティバルで行われるイベントのうち、競技会であるチャンピオンシップについては多くの人がビデオで見ているでしょうが、一流のパフォーマーが共演するカスケード・オブ・スターズ・ショーや、「お楽しみ会、一発芸大会」的な毎夜のレネゲード・ショーはハイライト・ビデオに細切れで収録されているのみで、見たことがない人も多いと思います。このオムニバス・ビデオを買えば、少ない投資で、「チャンピオンシップ以外のショーやイベントのおいしいところだけ」を覗き見することができます。また、「パフォーマーの名前、出演の年とフェスティバル会場」が表示されるので、有名どころのジャグラーの顔と芸風を把握したり、これから買うフェスティバル・ビデオを選ぶための手がかりとして使ったり、という役立て方もあります。

何組かのジャグラーについては、若い頃とその後の容貌の違いや成長、スタイルの変遷を見ることができ、これもまた楽しみの1つです。

一方で、「所詮オムニバスであり、つまみ食いには過ぎない」という欠点もあります。演技の要所だけをせいぜい1分程度までしか使っていないので、その前後の演技の流れが分からず、初めて見た人にとっては「その演技がなぜ面白いのか、かっこいいのか、きれいなのか」が分からないであろう箇所が多々ありました。中でも「コメディ」の章は、その傾向が顕著です。私が大好きな John Gilkey の帽子掛けのルーチンも、導入部無しでいきなり見せられると色あせてしまい残念に感じました。たとえば、ジャグリングをぜんぜん知らない人にジャグリングの楽しさを伝えたい場合、「おいしいところつまみ食い」であるこの DVD は一見良さそうに思えるのですが、実際はかえって退屈させてしまうのではないかと感じました。むしろ、自分が気に入った年のチャンピオンシップや好きなパフォーマーのビデオを1本選んで見せる方が、分かってもらえる気がします。

以下、章立てと内容、出演者を簡単に列挙します。

#### The Artistry of Juggling

ジャグリングに新しい要素を取り込んだり、ジャグリングの技の美しさを追求したりする、「芸術としてのジャグリング」を取り上げます。

Dan Menendez(ピアノ上でバウンス), John Gilkey(帽子掛け), Michael Menes(クラブ・スウィング、メテオ), Jay Gilligan(ボールのジャンプ台), Pat McGuire(帽子), Luke Wilson(クラブ), John Held(1ボール)

#### Comedy

コメディを得意とするジャグラー達の得意ネタや語り草となったパフォーマンス。

Frank Oliver(軟体ジャグリング), Arsene Dupin(髭剃り), David Deeble(掃除機),

Butterfly Man(客いじり, 再現ショー), Flaming Idiots(自分達がボールに), Tyler Lincoln(ドライバーピンポン玉), Avner The Eccentric(孔雀羽根), Bob Nickerson(4バスケットボール・ドリブル), Stoolies(椅子を使った3人パッシング), Rhys Thomas(ディアポロ), The Passing Zone(人間ジャグリング), Steve Mills(落ち葉吹き飛ばし機)



## Diabolo

なぜディアボロだけ括り出してあるのかは不明。進歩の著しい分野なので年代順に並べて比較すると面白そうだが、そういう視点はない。人によるスタイルの違いは面白い。  
Donald Grant, Jochen Schell, Fritz Grobe, Martin Mall, Ryo Yabe(矢部 亮)

## Teams

チームの演技。解散しているチームも多いので、メンバー個人の名も入れて欲しかったところ。  
Raspyni Brothers (as Juggling Elvis), Passing Zone, Gizmo Guys, Blink, Darn, Good & Funny, Cousin Brothers, AirJazz(棒), Clockwork(植木鉢), Double Trouble, LaSalle Brothers, Lukaluka, Vova&Olga, Saccade, Team Rootberry

## Legends

ジャグリング界の生ける伝説、あるいは伝説となるであろう人々。Bobby May や Francis Brunnなど、過去の名ジャグラー達の映像も資料として入れてくれることを期待していたのだが、やはり難しかったようである。

Kris Kremol(帽子), Gregory Popovich(はしご + 5クラブ), Albert Lucas(トーチでアルバート), Sergei Ignatov(クラブと11リング・フラッシュ: 1991), Bob Bramson(フープの至芸), Anthony Gatto(少年時代1986年の8リングから 1989, 1991, 1995, 2003現在まで), Michael Davis(コメディ), Victor Kee

## Women of Juggling

女性ジャグラー達のパフォーマンス。

Francoise Rochais(1995, 2003), Dorothy Finnigan, JoAnne Swaim, Cecille Poncet, Gana Maximove & Anik Tione, Cindy Marvel, Lana Bolin

## It all happens on the gym floor

ハイライト・ビデオにあるような、ジムでの練習やワークショップの様子。

-----

ショーの会場で撮影したビデオ映像が中心なので、DVDでも画質はさほど良くありません。コメディの部分を除き、ほとんどセリフはないので、英語が聞き取れなくても大丈夫です。DVDのメニューは整備されておらず、パフォーマーごとにチャプターが切れてあって、チャプター送りができるだけです。矢部亮さん以外の日本人としては、江戸太神楽・鏡味小仙師匠とマサヒロ水野氏が短時間ですが取り上げられています。

老婆心ながら書いておくと、このように多くのパフォーマーが登場するオムニバスは権利関係がなにかと難しいので、将来入手できなくなる可能性も皆無ではありません。欲しいと思ったら、迷わず早めに買っておくのが吉です。

DVD(リージョンフリー、NTSC)60分、Alan Plotkin Production 制作。

IJA (<http://www.juggle.org>) より直接購入の場合、会員20米ドル、非会員 25 米ドル。

他に Dube, ナラン八などで取り扱い。

## **【 Best of the Seniors, 1984-2000 】**

毎年 IJA フェスティバル内で開催されるチャンピオンシップの成年個人の部について、1984年から2000年までの演技を1本のダイジェスト版にまとめたものです。各年の優勝者16人(1987年優勝の Benji Hill を除く)の演技をほぼノーカットで収録し、その他の出場者についてはもっとも特徴的な部分を選んで数十秒程度ずつ収録しています。

今までビデオが発売されていなかった古い時代のチャンピオンシップの様子やレベルが分かったり、有名ジャグラーの若い頃の芸風が見られたりと、チャンピオンシップのビデオを全部揃えている人にとっても買う価値はあります。個人的には、毎年違う芸をしている Bob Nickerson が面白かったです。1986年にAnthony Gatto が最年少で優勝した演技も入っています。

ただし、1984年は白黒で顔すら判別できないような画質ですし、その後はカラーになっても悪い画質が数年続きます。ジャグリングの技術も近年に比べると高いとはいえないので、資料的な価値を求めない人は、1980年代目当てにわざわざ買う必要はないでしょう。

1990年代以降はチャンピオンシップ・ビデオを揃えている人にとってはおなじみの内容ですが、「えりすぐりではずれがない」という意味で、見る時間に対する効率がよいというメリットはあります。いつ誰がどんなことをやっていたかを知るための目次のようにも使えるでしょう。  
もちろん、「チャンピオンシップ・ビデオを何本も買うお金がない」という人には特にお勧めです。  
1991年にチャンピオンシップの舞台でマサヒロ水野氏が行った、けん玉デモンストレーションの様子が収められているのは、個人的に思いがけないボーナスでした。

チャンピオンシップ会場で撮影したビデオのため、画質はさほど良くありません。前に書いた通り、1980年代は汚いです。最近、私が持っている VHS 版から DVD-R 版に変えて再発売されたようですが、同じマスターからの焼き直しなので画質は改善されていないと思います。セリフはないので、英語の聞き取りは不要です。

DVD-R(リージョンフリー、NTSC)2時間40分、Alan Plotkin Production 制作。  
IJA <<http://www.juggle.org>> より直接購入の場合、会員20米ドル、非会員 25 米ドル。  
ナラン八では VHS 版を取り扱っています(2005年1月現在)。

[西川 正樹 <nishi-m@tkf.att.ne.jp>]



## ご報告

### 【日本経済新聞に掲載】

「ジャグパル」というジャグリング情報誌を個人で編集発行している“変なおじさん”ということで私が日本経済新聞・朝刊の文化欄(12月17日付)に紹介されました。  
この欄にはパフォーミングアーツ関連の方々も時折紹介されるので毎日チェックはしているのですが、私が載ることになるとは、記者の方には本当に私なんかでいいの?と念を押ししたのですが、いざこうして記事になるとなんだか立派な文化人かのごとく見えて、読者の方々は錯覚してしまいますね。世間様に申し訳ない。[冷汗]  
なにはともあれ(発行)回数を重ねていけばそれなりに何か見えてくることもあるし、こうやって続けられるのも皆様のおかげです。今後ともよろしくごひいきの程を。

[安部 保範]



by いいづか ちささん

## 編集後記

日経新聞での記事の見出しは『大道芸師 紙上に踊る ~ 無料情報誌を発行、インタビューや歴史紹介 ~』となっていました。ジャグパルという紙上で様々なアーティストが登場して賑わう様を表現していると推測するのですが、気に入りました。このタイトル。  
今年も編集方針であるミーハー精神を失わずに、あまり気張らずにほどほどに微力ながら頑張りたいと思います。ご支援方よろしくお願い致します。  
ジャグパルは私という一個人が野次馬根性丸出しで、単なる趣味として発行して、特定の企業、団体あるいはパフォーマー個人には一切関係しているものではありません。  
ジャグパルはWeb上でも見られますので、紙での郵送が不必要な方はこちらでご連絡ください。  
WebサイトJugPal : <<http://www.chansuke.net/jugpal/>>  
編集発行人: 安部保範  
住所: 横浜市栄区公田町424-9 (〒247-0014)  
見世物広場: <http://www.chansuke.net>  
E-mail : [chansuke@chansuke.net](mailto:chansuke@chansuke.net)